

兎角してはした夕立ばかり也

㊤ 嘉永版発句集初出・発句鈔追加・希杖本句集

㊦ 発句鈔追加、上五「とかくして」。座五「ばかりなり」。希杖本句集、上五「とかくして」。座五「ばかり也」。稿本発句題叢、上五「とかくして」。座五「ばかり哉」。

○あとからもまたござるぞよ小夕立

㊤ 七番日記(文化10・5)・志多良

㊦ 七番日記以下いずれも上五・中七「迹からも又ござるぞよ」。

夕立や行灯直す小縁先

㊤ 八番日記(文政2・6)

○蟻の道雲の峯よりつゞきけり

㊤ 八番日記(文政2・6)

㊦ 梅塵本八番日記(文政2)・おらが春・文政版発句集、座五「つゞきけん」。文政九・十年句帳写(9)・希杖本句集、座五「つゞきけん」。

○湖水から出現したり雲の峰

㊤ 文政句帳(6・6)・ほまち畑

㊦ ほまち畑、この句を立句とした一茶・希杖・知洞・文虎・其秋の五吟歌仙を収める。末尾に「文政六年六月十七日」。

○投出した足の先なり雲の峯

㊤ 七番日記(文化10・6)・志多良・句稿消息

㊦ 七番日記・志多良・句稿消息、中七「足の先也」。

○川狩のうしろ明りやむら木立

㊤ 稿本発句題叢・希杖本句集

○川がりや地蔵のひぎの小わき差

㊤ 七番日記(文化10・6)・志多良・句稿消息

㊦ 七番日記、座五「小脇差」。志多良・句稿消息・文政版発句集、中七以下「地蔵の膝の小脇差」。

玉川

○萩もはや色なる浪や夕はらひ

㊤ 文政句帳(8・6)

㊦ 七番日記(文化15・6)、中七以下「色なる波ぞ夕萩」。

○麻の葉に借錢書て流しけり

㊤ 七番日記(文化10・5)・志多良・句稿消息

㊦ 志多良(一・三||重出)。

形代をとく吹ふるせ萩すゞき

㊤ 嘉永版発句集初出(中七「とく吹なくせ」の誤りか)

㊦ 稿本発句題叢、中七「とく吹なくせ」。発句鈔追加、中七以下「とくふぎなくせ萩芒」。

形代にさらばくをする子哉

㊤ 文政句帳(8・6)

灯籠のやうな花咲御祓かな

㊤ 七番日記(文化10・5)・志多良(重出)・句稿消息・稿本発句題叢・発句鈔追加・希杖本句集

㊦ 七番日記・志多良・句稿消息・希杖本句集とも中七以下「やうな花さく御祓哉」。

花さく御祓哉」。

○身の上のかねとしりつゝ夕涼み

- ㊦ 文化六年旬日記(5)・随齋筆記・稿本発句題叢・物見塚・希杖本句集

㊦ 文化六旬日記・希杖本、中七以下「鐘と知りつゝ夕涼」。随齋筆記・発句題叢、中七「鐘としりつゝ」。物見塚、「身のうへの鐘としりつゝ夕涼み」。文政版発句集、中七以下「鐘ともしらで夕涼」。

裏長屋のつきあたりに住す

涼風の曲りくねつて来りけり

- ㊦ 七番日記(文化12・6)・句稿消息・発句鈔追加

㊦ 七番日記、前書「裏店に住居して」、座五「来たりけり」。句稿消息、前書「うら長屋のつきあたりに住て」。発句鈔追加、前書「裏家住居」。中七「まがりくねつて」。

丘の家や蓮に吹れて夕茶漬

- ㊦ 稿本発句題叢・発句鈔追加、希杖本句集

㊦ 発句題叢、中七「蓮ニ吹かれて」。発句鈔追加、中七「蓮にふかれて」。七番日記(文化10・6)、上五・中七「誰家や蓮に吹かれて」。志多良・句稿消息、上五・中七「誰宿ぞ蓮に吹かれて」。

萍の花よこい／＼爺が茶や

- ㊦ 七番日記(文化9・5)・稿本発句題叢・希杖本句集

㊦ 七番日記・希杖本句集、中七以下「花よ来い／＼爺が茶屋」。発句題叢、中七「花よ来い／＼」。発句鈔追加、中七以下「花よこい／＼爺が茶屋」。

○むだ花にけしきとられて青瓢

- ㊦ 七番日記(文化9・7)・株番・稿本発句題叢

㊦ 文政版発句集、中七以下「気色とられし瓢かな」。希杖本句集、中七以下「気色とらるゝ瓢かな」。

団扇はつて先そよがする萍かな

- ㊦ 嘉永版発句集初出(座五「葎かな」の誤りであろう)

㊦ 文化句帳(2・4)・稿本発句題叢、上五「団張て」。座五「葎哉」。御桜・一茶園月並、上五「団扇張て」、座五「葎哉」。発句鈔追加、上五「団扇張て」。座五「葎かな」。希杖本句集、上五「団張て」、座五「葎かな」。

臼井峠にて

○信濃路の山が荷になる暑かな

- ㊦ だん袋

㊦ 上五・中七「しなの路の山が荷ニなる」。文政版発句集、上五・中七「しなの路の山が荷になる」。

○路の葉にぼんと穴あく暑かな

- ㊦ 七番日記(文化12・6)・希杖本句集

㊦ 七番日記、中七「ぼんと穴明く」。文政版発句集、座五「暑哉」。関宿舟中

暑き夜の荷と荷の間に寝たりけり

- ㊦ 八番日記(文政2・10)

㊦ 上五「暑夜の」。米直段(値)ぐつくとさがる暑かな

- ㊦ 嘉永版発句集初出

㊦ 文政九・十年句帳写(9)、「穀直段どか／＼下るあつき哉」。希杖本句集、「穀直段どか／＼下る暑さ哉」。

は桶としらでや」。句稿消息、上五「魚どもや」。おらが春、上五「魚どもや」。座五「門涼ミ」。

此月に涼みてのない夜なりけり

㊤ 八番日記(文政2・5)

㊦ 座五「夜也けり」。

人形町

人形に茶をはこばせて涼み哉

㊧ 嘉永版発句集初出

㊨ 八番日記(文政2・2)、座五「門涼」。同(2・5)、座五「門

すゞみ」。おらが春、座五「門涼ミ」。発句鈔追加、前書「行田人形

町」。座五「門涼」。

門涼人の朝がほ咲にけり

㊩ 稿本発句題叢・発句鈔追加・希杖本句集

㊪ 発句題叢、中七「人の薺」。発句鈔追加、中七「人のあさがほ」。

希杖本、上五・中七「門涼み人の薺」。

銚子にて

○朝涼や汁の実を釣背戸の海

㊫ 稿本発句題叢・希杖本句集

㊬ 発句題叢、前書「銚子」。座五「せどの海」。希杖本、前書「銚

子」。中七「汁の実をつる」。文政版発句集、中七「汁の実をつる」。

七番日記(文化14・6)、上五「涼々や」。座五「せどの海」。

きのふは鮮魚に宴してけふは松宇仏

○夜涼が笑ひ納めでありしよな

㊭ 七番日記(文化13・6)

㊮ 前書「七日くとうつりに」。文政九・十年句帳写(10)、前書

「同所(注、長沼)松宇の追善」。「夕涼みが笑止仕舞と成しかな」。希杖本句集、前書「同所松宇ノ追善」。「夜涼みが笑ひおさめとなりしよな」。

○涼風やちから一ぱいきりぐす

㊯ 七番日記(文政7・6)

㊰ 中七「力一ぱい」。

○すゞ風も隣の舟のあまりかな

㊱ 句稿消息

㊲ 上五「涼風も」。座五「あまり哉」。七番日記(文化12・6)、「涼

風も隣の松のあまり哉」。

拵た露も涼しや門の月

㊳ 稿本発句題叢・発句鈔追加・希杖本句集

㊴ 発句題叢・発句鈔追加、上五「拵へた」。

江戸住人

銭なしは春草も見ず門すゞみ

㊵ 八番日記(文政2・6)

㊶ 座五「門涼み」。梅庵本八番日記(文政2)、前書「江戸住居」。

座五「川すゞみ」。

おく信濃に浴して

下々も下々下々の下国の涼しさよ

㊷ 七番日記(文化10・6)・志多良・句稿消息

㊸ 七番日記、前書なし。志多良・句稿消息、上五・中七「下々も

下々下々の下国の」。

真蹟、「群蠅や世の中よしと草そよぐ」。

山蟬のたもとの下を通りけり

㊤ 八番日記(文政2・6)

㊤ 上五・中七「山ゼミの袂の下を」。文政句帳(5・6)、上五・中七「山の蟬袂の下を」。全集本発句篇、中七「たもとの中を」。

松の蟬どこ迄鳴てひるになる

㊤ 八番日記(文政2・6)・おらが春・発句鈔追加

㊤ 八番日記、「松のセミどこ迄鳴て昼になる」。おらが春、中七以下「どこ迄鳴て昼になる」。発句鈔追加、「松のせみどこまで鳴て昼になる」。

新家賀

○涼しさや糊のかはかぬ小行灯

㊤ 八番日記(文政3・5)

㊤ 梅塵本八番日記(文政3)、前書「賀新宅」。座五「丸行燈」。

春甫京へ行を送る

○涼しからん這入口から加茂の水

㊤ 文政版発句集初出

両国橋上

○下見てもはう図がないぞ涼舟

㊤ 文政版発句集初出

㊤ 中七、「法図はないぞ」。

涼しさや笠を帆にして煮売舟

㊤ 八番日記(文政2・8)

㊤ 座五「煮うり舟」。

四条河原

涼風に月をも添て二文かな

㊤ 八番日記(文政2・6)

㊤ 座五「二文哉」。七番日記(文化9・5)、前書「廿一日 四条河原」。座五「五文哉」。同(15・6)、座五「五文哉」。同(10・5)、「涼しさに雪も氷も二文哉」。

○涼しさや弥陀成仏の此かたは

㊤ 句稿消息・文政九・十年句帳写(10) 希杖本句集

㊤ 句稿消息、前書「日光祭り御役人付といふもの題ニ分て二百年忌の真似をしたりし時 東本願寺 井」。上五「花さくや」「涼しさや」の両案を記し、前者を朱にて消す。句帳写、前書なし。上五・中七「すゞしさをみだ成仏の」。七番日記(12・5)、前書「東本願寺御門迹」。上五「涼しやな」。

○草雫今こしらへし涼風ぞ

㊤ 七番日記(文化11・5)・句稿消息

㊤ 七番日記・句稿消息・文政版発句集、中七「今拵へし」。

○藪村の貧乏なれて夕涼

㊤ 句稿消息

㊤ 句稿消息、中七以下「貧乏馴て夕涼ミ」。文政版発句集、中七「貧乏馴て」。七番日記(文化11・5)、「藪むらや貧乏馴て夕すゞみ」。

○魚どもが桶ともしらで夕涼

㊤ 文政版発句集初出

㊤ 上五「魚どもや」の誤りであろう。文政版発句集、上五「魚どもや」。座「五夕すゞみ」。七番日記(12・6)、上五・中七「魚ども

㊦ 志多良・句稿消息

㊦ 七番日記(文化10・6)、中七以下「空にひつゝく最上川」。稿本発句題叢、中七「空ニひつゝく」。希杖本句集、上五・中七「蟬啼や空にひつゝく」。蟬の声空にひつゝく最上川」。

○ねがはくは念仏をなけ夏の蟬

㊦ 文政版発句集初出

㊦ 中七「念仏を鳴け」。

○豊年の声をあげり門の蠅

㊦ 文政版発句集初出

㊦ 中七「声を上げり」。文政句帳(7・夏)、中七以下「声を上げり草の蠅」。

○蠅一つうてば南無あみだ仏かな

㊦ 七番日記(文化11・11)・句稿消息・希杖本句集・発句鈔追加

㊦ 七番日記、中七以下「打てばなむあみだ」仏哉」。句稿消息、「蠅一ツ打てばなむあみだ仏哉」。文政版発句集、中七以下「打てばなむあみだ仏哉」。希杖本句集、「蠅ひとつうてばなむあみだ仏哉」。発句鈔追加、「蠅ひとつ打ば南無阿弥だ仏かな」。文政句帳(7・夏)、「蠅を打つ度になむあみだ仏哉」。

○世がよくばもひとつとまれ飯の蠅

㊦ 八番日記(文政2・4)・おらが春

㊦ 八番日記、中七「も一ツ留れ」。おらが春、中七「も一ツ泊れ」。

○侍に蠅を追せる御馬かな

㊦ 文政版発句集初出

㊦ 七番日記(文化13・6)、「武士に蠅を追する御馬哉」。文政句帳(7・夏)、中七「蠅を追する」。

○やれうつな蠅が手をする足をする

㊦ 梅塵本八番日記(文政4)・真蹟

㊦ 梅塵本、上五「やれ打な」。八番日記(4・6)、上五「やよ打な」。中七「蠅が手を摺る」。関清水(初篇・二篇)、中七「蠅は手をすり」。花鳥文庫、「それうつな蠅は手もする足もする」。

まゝつ子や昼寝しごとに蚤拾ふ

㊦ 八番日記(文政2・6)

㊦ 中七「昼寝仕事に」。全集本、発句篇この句を「蚤」「昼寝」双方に採る。

○蚤の跡かぞへながらに添乳かな

㊦ 七番日記(文化15・4)・おらが春・某あて書簡(文政4・6・13付)

㊦ 七番日記・おらが春・書簡、座五「添乳哉」。発句鈔追加、おらが春第12話本文を引き(異同あり)、上五・中七「蚤のあとかぞへながらも」。左注に「此句本集ニ出テ文ナシ依テ又爰ニ出ス」。なお、七番日記はこの句の直前に、中七以下「吹いて貰てなく子哉」。

○蚤焼て日和占ふ山家かな

㊦ 文政句帳(8・5)

㊦ 文政句帳、座五「山家哉」。文政版発句集、上五「のみ焼て」。

草の葉や世の中よしと蠅さわぐ

㊦ 発句鈔追加、希杖本句集

㊦ 稿本発句題叢、座五「草さへぐ」。発句鈔追加、座五「蠅さはぐ」。

- ④ 七番日記(文化10・5)・志多良・句稿消息
 ⑤ 七番日記以下、中七「山に腰かけて」。
 無限欲有限命

○此風に不足いふなり夏ざしき

- ④ おらが春
 ⑤ 中七以下「不足いふ也夏座敷」。文政版発句集、座五「夏座敷」。
 八番日記(文政2・4)、上五・中七「此風の不足いふ也」。

○旅やせをめてたがるなり夏座敷

- ④ 文政句帳(7・11、8・6 Ⅱ重出)。「旅瘦を目出度〔が〕る也夏座敷」(7・11)。「旅瘦を目出度がる也夏座敷」。文政版発句集、「旅瘦をめてたがる也夏座敷」。

○まつかげや扇でまねく千両雨

④ 文政版発句集初出

○手にとれば歩行たくなる扇かな

- ④ 七番日記(文化15・4、12 Ⅱ重出)
 ⑤ 中七以下「歩行たる成扇哉」(15・4)。「歩たく成扇哉」(15・12)。文政版発句集、座五「扇哉」。

○西山や扇落しに行月夜

- ④ 七番日記(文化10・5)・志多良・句稿消息
 ⑤ 七番日記以下、中七「扇おとしに」。全集本発句篇、志多良を希杖本句集と誤る。

夕暮の腮につゝばる扇かな

- ④ 七番日記(文化8・6)・我春集・稿本発句題叢・希杖本句集

- ④ 七番日記・我春集、中七以下「腮につゝ張扇哉」。発句題叢・希杖本、中七以下「腮につゝ張扇かな」。発句鈔追加、上五・中七「夕ぐれの腰につゝばる」。

乙松や今年まつりの赤扇

- ④ 七番日記(文化7・6)・稿本発句題叢・希杖本句集
 ⑤ 七番日記、中七「ことし祭の」。発句題叢、中七「ことし祭りの」。希杖本、中七「今年祭りの」。発句鈔追加、上五・中七「乙松がことし祭りの」。

小座頭の天窓へかぶる扇かな

- ④ 八番日記(文政2・2)・希杖本句集
 ⑤ 八番日記、座五「扇哉」(梅塵本「扇かな」)。同(2・閏4)、中七以下「天窓にかむる扇哉」。おらが春、中七「天窓にかぶる」。

他の人の見るも恥し夏ざしき

- ④ 八番日記(文政2・7)
 ⑤ 中七以下「見る〔も〕はづかし夏座敷」。全集本、上五「田の人」と誤植。

独楽坊を訪ふに錠のかゝりければ、三界無安といふ事を

○蠅よけの草を釣して扱どこへ

- ④ 句稿消息
 ⑤ 前書「独楽坊を訪ニ錠のかゝりて」。杖の竹、中七以下「草もつるして扱どこえ」。七番日記(文化12・6)、前書「独楽庵を訪ふに不逢」。上五「蠅除の」。座五「又どこへ」。文政版発句集、中七「草も釣して」。

○蟬鳴や天にひつつく筑摩川

下「降るにどつちへでへろかな」。
朝やけがよろこばしいか蝸牛

㊤ 文化句帳(2・5)

㊦ 稿本発句題叢、上五「夕やけが」。発句鈔追加、上五「朝やけの」。
全集本発句篇、上五「夕やけが」と誤る。

○柴の戸や錠の替りにかたつぶり

㊧ 随齋筆紀(文化12・夏)

㊨ 七番日記、上五「柴門や」(全集本、「柴門」に「さいもん」とル
ビ)。中七「錠のかはりの」。随齋筆紀・文政版発句集、中七「錠の
かはりに」。句稿消息、上五・中七「かくれ家や錠のかはりに」。

○かたつぶりそろく登れ不二の山

㊩ 文政版発句集初出

㊪ 座五「富士の山」。文政句帳(6・10)、「蝸牛ともくく不二へ上
る也」。同(8・4)、「蝸牛気永に不土へ上る也」。

○なか／＼に安堵がほなり羽抜鳥

㊫ 七番日記(文化11・5)

㊬ 中七以下「安ど顔也羽ぬけ鳥」。文政版発句集、中七「安堵貌な
り」。

○六月や月夜見かけて煤払

㊭ 八番日記(文政2・2、閏4日重出)・発句鈔追加

㊮ 八番日記(2・2)、座五「煤はらい」^(心)。同(閏4)、「月夜見懸て
煤はらひ」。文政版発句集、座五「煤はらひ」。

小金原

○母馬が番して吞す清水かな

㊯ 八番日記(文政2・6)・おらが春・稿本発句題叢・発句鈔
追加

㊺ 八番日記、前書なし。おらが春・発句題叢、座五「清水哉」。希
杖本、前書「小金原にて」。上五「はく馬が」。座五「清水哉」。

山里は馬にかけるも清水かな

㊻ 八番日記(文政2・4)

㊼ 座五「清水哉」。七番日記(文化10・5)、中七以下「馬の浴るも
清水哉」。同(11・5)、中七以下「馬に投つける清水哉」。

○人來たら蛙になれよ冷し瓜

㊽ 志多良・句稿消息・稿本発句題叢・希杖本句集

㊾ 志多良・句稿消息、原本「蛙」に「カヘル」とルビ。文政版発句
集、中七「かへるになれよ」。七番日記(文化10・6)、中七「蛙と
なれよ」。

初瓜を引とらまいて寝た子かな

㊿ 八番日記(文政2・2)・おらが春

㊽ おらが春、「はつ瓜を引とらまへて寝た子哉」。

三日月とひとつ並や冷し瓜

㊾ 梅塵本八番日記(文政2)

㊿ 中七「一ツ並びや」。

あさら井や小魚と遊ぶ心太

㊿ 稿本発句題叢・発句鈔追加

㊿ 希杖本句集、上五・中七「山水や小魚とあそぶ」。同、中七「小
魚と騒ぐ」。全集本発句篇、中七「小魚と並ぶ」と誤る。

○旅人や山にこしかけて心太

「放鵜の子の鳴舟にもどりけり」。
賑しう鐘の鳴込鵜舟かな

㊦ 稿本発句題叢・発句鈔追加・希杖本句集

㊦ 発句題叢・希杖本、「賑はしく鐘のなり込鵜舟哉」。発句鈔追加、
「賑はしく鐘の鳴込鵜船かな」。

鵜のまねをうより功者な子供かな

㊦ 梅塵本八番日記(文政2)

㊦ 「鵜の真似を鵜より功者な子供哉」。おらが春、「鵜の真似ハ鵜よ
り上手な子ども哉」。

○初螢ついとそれたる手風かな

㊦ 七番日記(文化15・5、12_{II}重出)

㊦ 七番日記(15・5)、「はつ螢つひとそれたる手風哉」。同(15・
12)、「はつ螢ついとそれたる手風哉」。文政版発句集、座五「手風
哉」。全集本、中七「さつとそれたる」と誤る。

最うひとつ川を越とよ飛螢

㊦ 嘉永版発句集初出

㊦ 文政句帳(8・4)、「又一ッ川を越せとやよぶ螢」。

○ゆけ螢とくく人の呼うちに

㊦ 七番日記(文化11・11)・句稿消息・其翠あて書簡(某年6・

6付)・発句鈔追加・希杖本句集

㊦ 七番日記・句稿消息・書簡・希杖本、上五「行け螢」。座五「よぶ
うちに」。発句鈔追加、座五「よぶ内に」。希杖本、「初螢行けく
人のよぶうちに」。

大螢ゆらりくと通りけり

㊦ 八番日記(文政2・6)・おらが春

㊦ 八番日記、中七以下「よらりくと通りけり」「せかずによらり
く哉」の両案連記。

不忍池

○螢火や呼らぬ龜ハ膳先へ

㊦ 文政版発句集初出

㊦ 七番日記(文化15・4)、座五「手元迄」。

きれわらぢ螢とならば墨田川

㊦ 文政版発句集初出

㊦ 座五「隅田川」。文化句帳(5・4)、「古わらぢ螢」とならば角
田川」。希杖本句集、「古わらぢ螢とならば角田川」。

○夕月や大はだぬいでかたつぶり

㊦ 七番日記(文化10・6)・志多良・句稿消息

㊦ 七番日記・文政版発句集、中七「大肌ぬいで」。志多良・句稿消
息、中七「大肌ぬいで」。座五「かたつぶり」。某あて書簡(文政4・
6・13付)、上五・中七「坂口や大肌ぬいで」。

我袖を親とたのむか逃ぼたる

㊦ 梅塵本八番日記(文政2)

㊦ 風間本八番日記(文政3・6)、中七以下「草と思ふかはふ螢」。

里俗かたつむりをでいろといふ

此雨の降にどつちへでいろかな

㊦ 文政句帳(7・夏)・発句鈔追加

㊦ 文政句帳、前書なし。座五「でいろ哉」。発句鈔追加、前書なし。
上五「この雨の」。たねおろし、前書「郷談に蝸牛デハ、ルビマシといふ」。中七以

○茨の花こゝをまたげと咲にけり

㊤ 寛政三年紀行(4・8)

㊤ 寛政三年紀行、「(四月)八日晴、古郷へ足を向んといふに、道迄同行者有。二人は女、二人は男也。行徳より舟に乗て、中川の関といふにかゝるに、防人、怒の眼おそろしく、婦人をにらみ返さんとす。是おはやけの掟ゆるがせにせざるはことわり也。又舟人いふやう、「藪の外より、そこく」のうちを通りて、かしこへ廻れ」といふ。とく教のまゝにすれば、直に関を過る事を得たり。誠に孟嘗君の舌もからず、浦の男の知恵もたのます。げにく丸木をもて方なる器洗ふがごとく、隅ミくの下闇を見逃(す)とは、ありがたき御代にぞありけ(る)」に、この句を添える。寛三紀行・文政版発句集とも、中七「爰をまたげと」。

短夜に竹の風くせ直りけり

㊤ 文化句帳(5・4)、稿本発句題叢・発句鈔追加・希杖本句集

集

㊤ 文化句帳・発句題叢・希杖本句集、中七「竹の風癖」。

起くゝに慾目引ばる青田かな

㊤ 八番日記(文政2・6)・おらが春・発句鈔追加

㊤ 八番日記以下いづれも上五「起くゝの」。八番日記、中七以下「慾目引ばる青田哉」。おらが春、中七以下「慾目引張る青田哉」。発句鈔追加、中七以下「慾目引張青田哉」。

豆腐やが来る昼顔が咲にけり

㊤ 七番日記(文化10・6)・志多良・句稿消息

㊤ 七番日記以下いづれも、上五「とうふやが」。

夏の夜や二軒して見る草の花

㊤ 稿本発句題叢発・句鈔追加・希杖本句集

㊤ 発句題叢、座五「艸花」。

源氏の題にて

夕がほや男結の垣にさく

㊤ 嘉永版発句集初出

日々懈怠不惜寸陰

○けふの日も棒ふり虫よ翌日も又

㊤ おらが春

㊤ おらが春・文政版発句集、座五「翌も又」。風間本八番日記(文政2・夏)、前書なし。中七以下「棒ふり虫と暮にけり」。梅塵本八番日記(文政2)、前書なし。中七以下「子子むしと暮しけり」。

○ひいき鶉は又もからみで浮みけり

㊤ おらが春・希杖本句集

㊤ おらが春、「ひいき鶉へ又もから身で浮みけり」。希杖本、中七「またもから身で」。文政版発句集、中七「又もから身で」。八番日記(文政2・6)、座五「浮にけり」。同(2・4)、「手馴鶉の又もから身で浮きにける」。

手枕や親子三人鶉のかせぎ

㊤ 八番日記(文政2・6)

㊤ 中七以下「おや子三人うのかせぎ」。

○はなれうが子の泣舟に戻りけり

㊤ おらが春

㊤ 「はなれ鶉が子のなく舟にもどりけり」。八番日記(文政2・6)、

㊤ 寛政紀行、中七以下「昼寝して聞田うへ唄」。書簡、中七以下「昼寝して聞田うへ唄」。文政九・十年句帳写、「耕すして喰ひ、織すして着る体たらく、今まで罰のあたらぬもふしぎ也」と前書して、「花の影寝まじ未来が恐しき」「真黒な藪と見へしが寒念仏」「勿体なや昼寝して聞田植唄」。文政版発句集、中七以下「昼寝して聞田植唄」。信濃路や上の上にも田うゑ唄

㊦ 板本発句題叢

㊦ 座五「田植うた」。八番日記(文政4・8、「しなのぢや山の上にも田植笠」。稿本発句題叢、「しなの路や山の上にも田植笠」。希杖本句集、信濃路や山の上にも田植笠」。

身一つすぐすとて女やもめの哀は

おのが里仕舞てどこへ田うゑ笠

㊧ 八番日記(文政2・2、5 重出)、おらが春・発句鈔追加

㊧ 八番日記(2・2)、前書「身一つすぐすとて女やもめ」の「哀は」、中七以下「仕廻てどわへ田うへ笠」。同(2・5)、前書「身一つすぐすとて女やもめの哀は」、中七以下「仕廻ふてどはへ田植笠」。おらが春、前書「身一つすぐす迎山家のやもめの哀さハ」。中七以下「仕廻てどこへ田植笠」。発句鈔追加、前書「身一つすぐすとて女やもめのあはれさを」。中七以下「支舞てどこへ田うへ笠」。希杖本句集、前書「さなふもせざるやもめの哀さは」。「おのが村仕廻てどこへ田植笠」。

任よし

唐人も見よや田植の笛太鼓

㊨ 八番日記(文政2・6)・発句鈔追加・希杖本句集

㊨ 八番日記以下いずれも、前書「任吉」。希杖本、中七「みよや田植の」。発句鈔追加、上五「から人も」。

○早乙女や箸にからまる草の花
 ㊩ 七番日記(文化7・6)・稿本発句題叢
 稽古笛田はことくく青みけり

㊪ 七番日記(文化7・6)・某あて書簡(文化7・6・7付)・発句鈔追加

○寝せつけし子のせんたくや夏の月
 ㊫ 七番日記・書簡、上五「けいこ笛」。稿本発句題叢・希杖本句集、上五・中七「けいこ笛田がことくく」。

㊬ 文政句帳(6・5)

㊭ 文政版発句集、中七「子の洗たくや」。

夏山やひとりきげんの女郎花

㊮ 七番日記(文化7・6)・比止理多智

㊯ 七番日記、前書「廿七日会題」。中七「一人きげんの」。比止理多智、座五「をみなへし」。

なぐさみにはらを打なり夏の月

㊰ 八番日記(文政2・2、5 重出)、おらが春

㊱ 八番日記(2・2)、中七「わらをうつ也」。同(2・5)、上五・中七「なぐせみにわらをうつ也」。おらが春、上五・中七「なぐさみニわらを打也」。全集本(発句篇)、中七「腹を打なり」と校訂を誤る。

小むしろや茶釜の中の夏の月

㊲ 八番日記(文政2・5)

○蜘蛛の子はみなちりぐの身すぎ哉

㊤ 文政句帳 (5・4)

○かはほりやさらば汝と両国へ

㊤ 七番日記 (文化11・4)・句稿消息

まつて居る妻子もないか通し鴨

㊤ 文政句帳 (8・3、6 重出)

㊤ 上五「待つて居る」(3月)。「待つて居ル」(6月)。

烟して蝙蝠の世もよかりけり

㊤ 文化句帳 (3・4)・稿本発句題叢・希杖本句集

㊤ 文化句帳・希杖本、上五・中七「けぶりしてかはほりの世も」。

発句題叢、上五・中七「けぶりしてかはほりの世も」。発句鈔追加、

上五・中七「煙りして蝙蝠の世も」。

あやめめせ武門かやうに静なり

㊤ 嘉永版発句集初出

㊤ 文化五六年旬日記 (文化6)、「菖蒲ふけ浅間の烟しづか也」。

古婆々がかたにかたり蛇の衣

㊤ 文政句帳 (8・6)

㊤ 上五・中七「古ぼくが肩にかけたり」。

羽蟻出る迄に目出たき柱かな

㊤ 梅塵本八番日記 (文政2)

㊤ 中七「迄にめで度」。風間本八番日記 (文政2・4)、「羽虫出ル迄に目出度柱哉」。希杖本句集、中七以下「迄に目出度庵哉」。

はげ天窓簾をかけると行々子

㊤ 八番日記 (文政2・5)

㊤ 風間本、「元天窓簾かけるとか行くし」。梅塵本、「元天窓簾か

けるとかぎやうくし」。

○罷り出たるは此藪の墓にて候

㊤ 八番日記 (文政2・7)・おらが春

㊤ 八番日記、「曲出るは此藪の蟾にて候」。おらが春、「まかり出た

るハ此藪の墓にて候」。梅塵本八番日記 (文政2)、「まかり出たる

ものは此藪の蟾にて候」。

年寄の袖としらでやとらが雨

㊤ 梅塵本八番日記 (文政2)

㊤ 座五「虎が雨」。風間本八番日記 (2・6)、上五「とし寄の」。

座五「虎の雨」。

○とらが雨などかろんじてぬれにけり

㊤ 八番日記 (文政2・6)・おらが春・希杖本句集

㊤ 八番日記、中七「など軽じて」。おらが春、前書「五月廿八日」。

中七以下「など軽んじてぬれにけり」。希杖本句集、上五「虎が雨」。

座五「濡にけり」。文政版発句集、上五・中七「虎が雨など軽じて」。

妙義山

○五月雨や夜もかくれぬ山の穴

㊤ 寛政三年紀行 (4・14)

㊤ 文政版発句集、前書「妙義」。

粒々皆辛苦

○もたいなや昼寝してきく田植唄

㊤ 寛政紀行 (書込)・一白あて書簡 (寛政10・4・19付)・文政

九・十年句帳写 (文政10)・希杖本句集

㊤ 発句題叢、中七以下「おくれ松魚も月夜哉」。希杖本、中七「おくれ松魚も」。文化句帳(5・3)、「片里はおくれ鯉も月よ哉」。

○神国は天から薬ふりにけり

㊤ 文政版発句集初出

㊤ 文政版発句集、座五「降にけり」。文政句帳(5・4)、上五「神国」(かみのくに)。座五「降りにけり」。

○昼の蚊の来るや手をかへ品をかへ

㊤ 文政版発句集初出

㊤ 八番日記(文政4・5)、中七「さすや手をかへ」。

○我宿は口で吹ても出る蚊かな

㊤ 七番日記(文化7・8)・希杖本句集

㊤ 七番日記、座五「出る蚊哉」。

○隙人や蚊が出たくとふれ歩行

㊤ 文政句帳(5・5)

㊤ 文政句帳、座五「触歩く」。文政版発句集、座五「触歩行」。

○昼の蚊やだまりこくつて後ろから

㊤ 文政句帳(6・3、7・5 重出) 糖塚集

㊤ 文政句帳・糖塚集、座五「後から」。

○蚊柱の穴から見ゆる都かな

㊤ 七番日記(文化11・4)・句稿消息

㊤ 七番日記・句稿消息、座五「都哉」。

○年寄と見てや鳴蚊も耳のそば

㊤ 文政版発句集初出

㊤ 文政版発句集、上五「とし寄と」。八番日記(文政2・4)、中七

以下「見るや鳴蚊も耳の際」。おらが春、上五・中七「としよりと見るや鳴蚊の」。

○芝浦やはつ鯉から夜のあける

㊤ 文政版発句集初出

㊤ 中七以下、「初鯉から夜の明る」。文政句帳(6・3、4 重出)、中七以下「初松魚より夜が明る」。

○鹿の親笹吹風に戻りけり

㊤ 真蹟(一茶・関之両吟歌仙。「享和元年六月十八日の古反故より

ひろひ出しぬ。一茶」の追記あり。『茶翁聯句集』にも収録)・おらが春

㊤ 真蹟、前書「鹿の子の題をとりて」。中七以下「草吹く風にもど

りけり」。おらが春・文政版発句集、座五「もどりけり」。稿本発句題叢、中七以下「篠吹風ニもどりけり」。希杖本句集、中七以下「篠吹風にもどり風」。御桜、前書「かのこといふ題」。上五・中七「親

鹿ハ艸吹風に」。

○五月雨の竹にはさまる在所かな

㊤ 板本発句題叢

㊤ 享和句帳(3・5)、中七以下「竹に隠るゝ在所哉」。

○昼の蚊を後にかくす仏かな

㊤ 嘉永版発句集初出

鶯よ老をうつるな草の家

㊤ 板本発句題叢

㊤ 稿本発句題叢・希杖本句集、上五「鶯も」。座五「おれが家」。発句鈔追加、上五「黄鳥も」。座五「藪の家」。

㊦ 七番日記・随斎筆紀、中七以下「つけわたり也かんこ鳥」。文政版発句集、座五「かんこ鳥」。

閑窓

○吉日の卯月八日も閑古鳥

㊦ 七番日記(文化11・4)・句稿消息・稿本発句題叢・希杖本句集

㊦ 七番日記、前書「庵中」。座五「かんこ鳥」。句稿消息・発句題叢、前書なし。座五「かんこ鳥」。希杖本、前書「草庵」。座五「かんこ鳥」。

高野山

○地獄へは斯う参れとか閑古鳥

㊦ 句稿消息

㊦ 希杖本句集、中七「斯う参れとや」。文政版発句集、中七以下「斯う参れとやかんこ鳥」。

○前の世のおれがいとこか閑古鳥

㊦ 七番日記(文化10・4)・志多良

㊦ 七番日記、中七「おれがいとこか」「いとこ同土や」両案を記す。

○雲をはく口つきしたり暮

㊦ おらが春

㊦ おらが春、上五「雲を吐く」。座五「引墓」。文政版発句集、上五「雲を吐く」。

○目出たさは今年の蚊にも喰れけり

㊦ 七番日記(文化13・3、4)、随斎筆紀・句稿消息・希杖本句集

㊦ 七番日記(13・3)・随斎筆紀・句稿消息・文政版発句集、上五

「目出度さは」。七番日記(13・4)、上五「目出度(さ)は」。文化句帳(3・5)、中七以下「上総の蚊にも喰れけり」。

蚊の声になれてすや／＼寝る子哉

㊦ 八番日記(文政2・4)・発句鈔追加

㊦ 八番日記、中七「馴れてすや／＼」。発句鈔追加、中七以下「馴れてすやすや寝子哉」。

宵越の豆腐明りに藪蚊かな

㊦ 板本発句題叢・発句鈔追加

㊦ 発句題叢・発句鈔追加、中七「豆腐明りの」。享和句帳(3・11)、中七以下「とふふ明りや蚊のさはぐ」。稿本発句題叢・希杖本句集、中七以下「豆麸明りになく蚊哉」。

蚊柱の外にのうなき榎かな

㊦ 七番日記(文化9・5)・稿本発句題叢・希杖本句集

㊦ 七番日記・希杖本、中七以下「外は能なし榎哉」。発句題叢、中七以下「外ハのうなし榎哉」。発句鈔追加、中七「外は用なき」。

蚊いぶしもなぐさみになる独かな

㊦ 七番日記(文化10・5)・志多良・句稿消息・稿本発句題叢・希杖本句集

㊦ 七番日記・志多良・句稿消息、座五「ひとり哉」。発句題叢、中七以下「なぐさミニなる独哉」。発句鈔追加、中七以下「なぐさめになる独哉」。

我宿の後れ松魚も月夜かな

㊦ 稿本発句題叢・希杖本句集

㊦ 「鮓に成る間を配る枕哉」。文政版発句集、中七以下「間を配る枕かな」。文政句帳(8・6)、中七以下「間を歩く川辺哉」。

老翁岩にこしかけて一軸をさづくる図に

○我汝を待事ひさし時鳥

㊧ 七番日記(文化7・4。14・3、4)・魚洲あて書簡(文化14・4・3付)・おらが春

㊨ 七番日記(7・4)、前書なし。中七「待こと久し」。同(14・3)、前書「老翁岩〔に〕腰かけて一軸をさづくる図」。中七「待こと久し」。同(14・4)、前書「老翁岩〔に〕腰かけて一軸をさづける所」。中七「待こと久し」。書簡、前書「老翁岩に腰かけて一軸を授くる図に」。おらが春、前書「老翁岩に腰かけて一軸をさづくる図に」。中七以下「待こと久しほととぎす」。文政版発句集、座五「郭公」。

○是でこそ御時鳥まつに月

㊩ 文政版発句集初出

㊪ 文政版発句集、上五「これでこそ」。七番日記(文化9・3)・株番・随齋筆記、上五「それでこそ」。座五「松の月」。

這渡るはしの下よりほととぎす

㊫ 七番日記(文化14・9)・八番日記・おらが春・発句鈔追加

㊬ 七番日記、中七以下「橋の下より時鳥」。八番日記(文政2・2)、前書「棧」。中七以下「橋の下より時鳥」。同(2・閏4)、前書「棧」、中七以下「橋の下ヨリ」。おらが春春、前書「谷藤橋」。「這ワたる橋の下より」。発句鈔追加、前書「公藤橋」。中七以下「橋の下より郭公」。

○時鳥俗な庵ときみするな

㊭ 七番日記(文化11・4)・句稿消息

㊮ 文政版発句集、上五「ほととぎす」。

ほととぎすなくや頭痛のぬけるほど

㊯ 八番日記(文政2・2、2・4)

㊺ 八番日記(2・2)、時鳥鳴や頭痛のぬける程」。同(2・4)、「時鳥なげや」「抜る程」。

○此雨にのつびきならじ時鳥

㊻ 七番日記(文化11・4)・希杖本句集

㊼ 七番日記・希杖本、中七「のつ引ならじ」。句稿消息・稿本発句題叢、上五・中七「此雨はのつ引ならじ」。文政版発句集、「此雨はのつ引ならじほととぎす」。

○せはしさを我にうつすな子規

㊽ 句稿消息

㊾ 七番日記(文化10・4)、中七以下「人にうつすな時鳥」

鎮西八郎為朝人礫うつ所に

○時鳥蠅むしめらもよつく聞け

㊿ おらが春

㊽ おらが春・文政版発句集、中七「蠅虫めらも」。

○卯の花もちそうにさくか蜀魂

㊿ 文政版発句集

㊽ 中七以下「馳走にさくか子規」。七番日記(文化13・5)、「うの花も馳走にちりぬほととぎす」。

○先住のつけわたりなり閑古鳥

㊿ 七番日記(文化12・4)・随齋筆記

榎哉」。発句鈔追加、中七「又もにくまれ。希杖本、座五「榎哉」。
門番のほまちのけしの咲にけり

㊤ 稿本発句題叢・発句鈔追加・希杖本句集

㊤ 発句題叢、「門番がほまちの芥子の咲ニけり」。発句鈔追加、上五

「門番が」。希杖本、上五・中七「門番がほまちの芥子の」。享和句帳(3・12)、「門番がほまちなるべしけしの花」。

卯の花の吉日もちし後架かな

㊤ 八番日記(文政2・4)

㊤ 梅塵本八番日記、上五・中七「うのはなは吉日持し」。

庵の苔花さくすべもしらぬ也

㊤ 七番日記(文化9・4)・株番(重出)。

禅寺

○すみくも掃除とどくや木下闇

㊤ 文政句帳(8・6)

㊤ 文政句帳(8・6)、前書なし。中七「さうじ届くや」。文政句帳(8・3)、「隅く(う)のさふじとどくや手杵哉」。文政版発句集、前書「禅寺」。

○法談の手まねも見えて夏木立

㊤ 文政版発句集初出

㊤ 八番日記(文政3・10)、「夏談義(夜)の仕方も見へて夏木立(え)」。梅塵本八番日記(文政3)、上五「夜談義の」。

大寺は留守の体なり夏木立

㊤ 嘉永版発句集初出

㊤ 文政句帳(7・12、8・6)、上五・中七「山寺は留守の体也」。

笋の子に病のなきはなかりけり

㊤ 発句鈔追加・希杖本句集

㊤ 発句鈔追加・希杖本、上五・中七「笋に病のなきは」。志多良・稿本発句題叢、上五・中七「笋に病のなきも」。

首たけの水にもそよぐ穂麦かな

㊤ 八番日記(文政2・5)

㊤ 座五「穂麦哉」。

○せい出してそよげ若竹今の内

㊤ 一茶・呂芳・春甫・素鏡・掬斗五吟歌仙(未満、「文化七年五月廿二日於掬斗亭興行」)・稿本発句題叢・希杖本句集

㊤ 歌仙・発句題叢・希杖本・文政版発句集、座五「今のうち」。

○若竹と呼るゝうちもすこしかな

㊤ 文政版発句集初出

㊤ 座五「少かな」。七番日記(文化10・4)、中七以下「云るも一夜二夜哉」。句稿消息、中七以下「云るゝも一夜ふた夜哉」。志多良、中七以下「そよぐも一夜二夜哉」。

○あつばれの大若竹ぞ見ぬうちに

㊤ 八番日記(文政2・2、6)・おらが春

㊤ 八番日記(2・2)、上五・中七「あつばれ(の大)わか竹(ぞ)」。同(2・6)、上五・中七「あつばれの大若竹ぞ」。おらが春、中七「大ワか竹ぞ」。八番日記(2・5)、「少見る内(を)にあつばれわか竹(ぞ)」。

○鮮になる間に配るまくらかな

㊤ 文政句帳(8・3)

【研究ノート】

嘉永版『俳一茶発句集』入集の句(四)

黄 色 瑞 華

凡 例

一 一行めに、嘉永版『俳一茶発句集』をおく。ただし、漢字はおおむね現行文字とした。また、「もとの集」(文政版『一茶発句集』)にあるものは、句頭に○印を付した。

二 二行め以下に、㊤として、初出及び他書に所収の有無を書名等によって注した。

三 句形等に嘉永版発句集と異なるものがある場合、㊤以下にそれを示した。

四 嘉永版発句集の他は、主として一茶全集本により、必要に応じて一茶叢書本その他によった。例えば、『浅黄空』(叢書本)、『希杖本発句集』(萩原井泉水校訂『一茶遺稿・志多良』岩波書店)、『一茶発句鈔追加』(栗生純夫『一茶新考』西沢書店)などがそれである。

俳一茶発句集

夏の部(承前)

卯の花や白の目切と鶯と

㊤ 文化六年句日記・文化三十八年句日記写・春甫あて書簡(文化6・3・20付)・稿本発句題叢・発句鈔追加・希杖本句集
㊤ 文化六年句日記、上五・中七「卯花や白の目きりと」。書簡、中七「白の目きりと」。

○我上へ今に咲らんこけの花

㊤ 一茶翁終焉記

㊤ 終焉記、前書「ことし文政十年卯月のころ」。座五「苔の花」。文政版発句集、座五「苔の花」。七番日記(文化12・4)・随齋筆記、「我上にやがて咲らん苔の花」。

○かわくまで縄張庭や若葉吹

㊤ 文化句帳(8・3・5)、梅塵抄録連句集・発句鈔追加

㊤ 文政句帳・文政版発句集、上五・中七「乾く迄縄張る庭や」(3月)、「乾く迄縄張る庭やわか葉吹」(5月)。梅塵抄録本、一茶・白兔・露谷三吟歌仙の立句。発句鈔追加、上五「乾くまで」。

若葉してまたもにくまれ榎かな

㊤ 七番日記(文化11・4)・句稿消息・稿本発句題叢・発句鈔追加・希杖本句集

㊤ 七番日記・句稿消息・稿本発句題叢、「わか葉して又もにくまれ